SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

『静岡大学教育研究』第2号 巻頭言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 居城, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005838

『静岡大学教育研究』第２号　巻頭言

静岡大学・大学教育センター　副センター長
居　城　　弘

ここに『静岡大学教育研究』の第２号をお送りする。
グローバル化する競争、長引く経済不況、少子高齢化など経済社会の著しい変化のなかで、大学の果たすべき役割にたいする社会的な期待や「要請」がかってないほど強まってきていることについては、大学人それぞれが真剣に受けとめているところであろう。科学技術政策の推進による研究の高度化とならんで、高等教育としての大学教育の質の飛躍的向上が要求されている。

かの『２１世紀の大学像』答申が掲げる「知の再構築」、「世界水準の教育・研究」、「国際社会で活躍できる優れた人材」の養成などなどの諸目標についても、さまざまな意見と対応がありえよう。しかし、こうした高等教育の「政策方向」に、大学としていかなるスタンスで臨むのかは明確にしなければならないことである。大学としてその課題を回避することはできないであろう。それぞれの自立的判断により、個々の大学が独自に教育・研究の目標を掲げて、その実現に向けた努力を主体的に追求していくことが肝要であり、そのための「制度設計」であったはずである。

『大学設置基準の大綱化』以降の大学教育の改革の進捗状況を、現段階において評価することは容易な課題ではない。しかしようやく認識されるようになったことは、学部教育の再構築、専門教育の見直しを基軸とした４年一貫教育の再構築こそが、大学改革の中心的課題であること、教養教育と専門教育の有機的連携の確保という旧くて新しいテーマも、教養教育の重視という『呪縛』から解放されて、学士課程教育の見地からいかなる教養教育カリキュラムが望ましいのか、問題はこのように立てられるべきであるということに到達したのであった。平成１８年度からスタートする本学のカリキュラム改革はまさにこのことを基本として構想され、各学部の教育理念や教育目標をできるだけ尊重したものとなっている。もとより足並みがそろっているわけではない。理念が充分に制度として実現しているわけでもない。理念も含めて内容の充実はこれからという部分を多く残している。おそらくカリキュラム改革とは、教育の担い手による不断の改革以外にはありえないものなのであろう。

大学の財政基盤が年々弱体化を余儀なくされていくことや、性急な競争原理の導入がもたらしているゆがみにたいしては、これを直視して解決が模索されなければならない。しかしこのような厳しい状況を克服して大学のあるべき姿を追求する上で不可欠なことは、大学人としての「共同性」の基盤を、どこまで持続的で強固なものとして築き上げることができるかにかかっているように思われる。

大学教育の改革をめぐる各大学の取り組みもかつてない勢いで活性化しつつある。改革をめぐる大学間競争は本格化の段階を迎えている。法人化移行３年目を迎えて、静岡大学ならびに大学教育センターもその成果を問われる段階にさしかかっている。
大学教育センターを共通基盤とする、大学教育をめぐる研究活動や日ごろの教育実践の成果が、静岡大学の教育改革の前進に貢献するものとなることを望んでやまない。